から)と告白→比較的すこしの物をもらって、あるいはかえしてもらって、かえる→持ち筋の家まできてたおれると、憑きものははなれる。持ち筋の人の直接の意志には関係なく、憑きもの動物がその人の怨念をいわば代弁する形で行動するのである。つかれた人はときに、僧や神官がくるのを千里眼視し、しらぬはずの経文をよむなどの異能をしめす。これらの報告はいずれも医師が自分の見聞をしるしているものであって、前記被告人の医師だけでなく、一般の医師(尼子四郎もその一人である)もこういうことを信じていたのである。

榊俶は狐憑きについて、一、周囲がそう判断する、二、自分の体についている、周囲にいるとの妄覚、三、自分が狐になったとの妄想をもってそのように行動するという化身妄想(獣化妄想)、の三段階があるとし、その三、が眞正の狐憑症であるとした。ヨーロッパ世界で有名な狼人は、人が狼に変身して人をおそう、というものであって、榊の狐憑症はこの狼人にならっている。しかし呉は、獣化妄想とはべつに憑依妄想をのべ、そのなかに狐憑証(榊)をいれている。

ところで現在の教科書には、ついた神、動物のように行動するのが憑依妄想の典型例である、とかかれている。しかし、今回あつめた憑きもの例で、その動物らしく行動するもの(獣化妄想という程度のもの)はすくない。「どこの家からきた人狐で、こういう怨みがあってきた」とは告白するが、前述のように、その怨みはつく動物のものであることはごくまれで、持ち筋の人のものである。つまり、ここにでているのは、比較的せまい地域での人間関係のもつれである。どうも一口に憑きものといっても、単発例と、こういった持ち筋地帯のものとは、その現われ方がかなりことなっているようで、いずれこの点をくわしく比較検討したい。

(一九九五年一月例会)

帝国大学医学部歯科の軌跡

榊原　悠紀田郎

現在全国には大学医学部、医科大学は八〇あるが、その中で歯科部門をもっているものは六一である。なお医学部と並んで歯学部のおかれているものが一四ある。

しかしこれらの歯科の設置はきわめて多様な経緯で創設されている。それについてまず国立大学医学部を中心に検証した。

一、帝国大学医学部創設の経緯

まずはじめに国立大学医学部の創設の経緯を検証する。

国立大学医学部には現在でも「旧帝、旧六、新八、その他」という見えない一種のランク付けがあるといわれているが、その旧帝、帝国大学医学部について検討する。

帝国大学は一九四六年四月の官制で、東京・京都・東北・九州・北海道・大阪・名古屋の七つがあるが、そのすべてに医学部はおかれている。しかしその創設の経緯はきめて多様

である。

東京の場合は一八八六年、帝国大学設置とともに創設されているが、医学部にはその前駆的なものとなる長い歴史があり、それが統合された形となっている。

京都の場合は一八九九年、大学発足二年後になって創設されているが、これは京都病院という程度の前駆的なものはあるが、新発足に近い。

九州の場合は、一九〇三年に京都帝国大学第二医科大学という官制によって発足し、これは一九一一年の九州帝国大学発足より八年前に創設されるというきわめて特異な例となっている。

東北の場合は一九一五年、大学設立とともにすでにあった前駆的なものを取込む形で成立している。

北海道の場合は大学設立二年後の一九二〇年に創設されている。

大阪と名古屋の場合は両者とも大学発足以前にかなりはっきりした府立または県立の前駆的なものがあり、それの国立移管の形をとり、大阪は一九三一年、名古屋は一九三九年に創設されている。

二、帝国大学医学部における歯科

どの場合でも診療の充実とともに歯科の部門の必要性はあったと思われるが、東京の場合はすでに一八九七年ごろに和泉橋第二病院で担当していたようであるが、院長の佐藤三吉が、歯科学教室の設立を構想して、助手の石原久を指名して在外留学をさせて、一九〇三年に創設された。石原は助教授となったが、ほとんど自身は診療には当らず、検定出身の歯科医師を介補又は傍観生として担当させていた。また時としては歯科医師免許のない者にも歯科診療に当らせていたことが記録されている。その後一九〇四・五年の戦争による歯科患者の診療を引受けることとなり、傍観生の佐藤運雄に講師の身分を与えて戸山陸軍予備病院に派遣したが、そのころから、歯科へは陸軍軍医の委託学生が入局することとなる。

石原が教授となり歯科学教室となったのは一九一五年であるが、ここでは修復などの行為は医療に含まれないとして「歯科医は医局員たるを得ず」と定め、歯科診療には無資格のものを当らせるというケースも少なからずあった。

医局員の中にはこれに反ぱつするものも出たが、北村一郎は一九一七年、退局して新設の県立愛知医専の歯科学教室に転出する。北村はここで新しい理念で医局を形成して充実をはかる。この愛知医専は医大となったのち一九三一年に国立に移管し、のちに名古屋帝国大学医学部になるが、歯科部門はそのまま受けつがれる。しかし、歯学部は現在もない。

九州の場合は医学部設立七年後に、歯科学講座が発想されて、第一外科の問田亮次を在外留学させたのち一九二一年に歯科学講座として発足した。これが九州大学歯学部のルーツである。

大阪の場合は一九二六年、府立高等医学校のとき、耳鼻咽喉科の弓倉繁家を内地留学させたのち歯科学教室の主任とし

て創設されている。これが大阪医科大学→国立移管の経緯をとって引きつがれる。これが大阪大学歯学部のルーツである。

北海道の場合は、医学部設立七年後、一九二七年、付属病院に歯科が設置され、それが充実されて行く。歯学部が設置されている。

東北の場合は、県立宮城病院のころに歯科がおかれ、それが引きつがれる形で一九三三年、講師として野田穣が就任し、一九四二年からは講義としても歯科学が開講されている。その後歯学部も創設されている。

京都の場合は医学部の発足は早かったが、歯科学講座の創設は一九四四年に美濃口玄が助教授になってからはじめられた。これはすでに一九一六年から府立医大に、京大出身の本永七三郎が主任として歯科学講座をひらき活動していたためである。京大にも歯学部はおかれていない。

なお、帝国大学以外では千葉大学医学部の歯科はすでに一九一三年から県立千葉医専のときから第二外科で歯科を担当し、一九二一年に入戸野賢二が主任となってこれが国立移管校にひきつがれている。

私立大学医学部では一九二〇年、慶応義塾大学医学部設立とともに、岡田満が主任教授となり歯科学教室が発足している。

（一九九五年一月例会）

漢代の解剖学

家本誠一

中国古代医学は解剖学を基礎にして構築されている。この医学を理解する為にはその解剖学を知らねばならぬ。素問、霊枢、難経、漢書を資料として漢代の解剖学を考えた。

解剖に関する記述は漢書巻九十九王莽伝にある。「翟義党、王孫慶捕得、莽太医尚方與好屠共刳剝之、量度五蔵、以竹筳導其脈、知所終始、云、可以治病」。此の記述の要点は三つある。一つは五蔵の度量である。難経四十二難には、口歯から肛門に至る消化管各部の大きさと重さ、五蔵、胆、膀胱、気管と咽門の大きさと重さについての記載がある。この時の解剖の記録だと云う人があるが、確証は無い。二つは血管の走行を追って、起点より終点に至る全経過を確認したことである。血管系の全体像が心経と衝脈の記載に示されていることは後に述べる。三つはその臨床的活用である。

解剖という言葉は霊枢の経水第十二に見える。「若夫八尺之士、皮肉在此、外可度量切循而得之、其死可解剖而視之」。体表を度量切循して得たデータは霊枢の骨度第十四にある。解剖によって得られたデータの内、蔵府の大きさと重さは腸胃第三十一、平人絶穀第三十二に、血管の走行と長さは営気第十六と脈度第十七に、記されている。